

# 『絵本更科草紙』論（一）

——前編内の歪み——

近世版本は製品である。それは、書肆を中心に作者、絵師、彫師、摺師などによる、さまざまな工程を経て出来上がる。これを文学として評価していく場合、どうしても作者の意図というものを意識せざるを得ない。だが、あくまでも評価対象は、出来上がった、その版本から読みとれる「作品」になるはずである。

さて、今問題にしたいのは、予定変更をした跡が残る作品についてである。予定変更の跡が残っているということは、評価として減点対象であろう。しかし、それでもあえて予定変更をしたということは、それ以上の効果を期待していることである。ゆえに、変更の跡の指摘、変更の意図とその効果の解明、さらに初期構想の推定をしていくことは作品研究として有効であろう。後期読本というジャンルでは、作品の続き物化ということに伴って、この予定変更が行われることがある。本稿では、栗杖亭鬼卯作の読本『絵本更科草紙』について、続き物化に伴って発生したと思わ

れる、前編の中に存在する「歪み」を考えてみたい。

この作品は、全三編十五巻。前編は文化八（一八一）年八月刊、後編同九年刊、三編は文政四（一八二）年刊である。<sup>（注1）</sup>画師は前・後編が石田玉山、三編は一峯斎馬円。版元は前・後編が勝尾屋六兵衛、三編は河内屋嘉助。

先行研究としては、横山邦治氏と浜田啓介氏によるものがある。<sup>（注2）</sup>横山氏は、全三編十五巻の続き物読本という形について、前編の最初の題が『貞烈勇婦伝』であったことなどから、「前編執筆の時点においては、続きもの読本との意識はなかった」こと、前編序文に言う三条茂佐彦の口述した噺とは、既に定型を持っていた山中鹿之助の譚に加えた、「定型部分とは違う更科の話」であろうことを述べ、また浜田氏はそれを肯定した上で、次のような判断を下した。

①種本たる写本の存在を疑い、更科の譚または鹿之助出生の譚は「その創作は小説家の自由に委ねられた

藤 沢 毅

のであろう」とし、『絵本更科草紙』は「山姥説話にもとづき鹿背云云を工夫し」たものである。

②前編末にある後編内容予告と実際の後編の内容が齟齬することを指摘し、「予定の根本的な変更」があり、後編以下は「別個に構成せられたものである」。

③「鬼卵はもとの更科物語を鹿之助物語に傾斜させ、更にそれを十勇士物語に一層傾斜させたのであり、その十勇士物語への傾斜は後編執筆時になされたという事と、後編の成立は『里見八犬伝』に先立つ文化八年であ」り、「尼子十勇士伝の創始者は栗杖亭鬼卵その人である」。

④「リアリティを頗る欠く」「説話の連接体のような作風」ではあるものの、「尼子十勇士の鳩合を目標として作られている」という「結構の雄大」性や「壮大な構想」性がある。

⑤「水滸伝様式を、甚だ抽象化された枠組みとしてではあるが取り組んでいる」が、その一方で『湘中八雄伝』や『坂東忠義伝』に於てもそうであるが、主君となるべき者が遍歴の途中、勇士と遭遇しては家臣の契約をして行くという形、桃太郎・頼光・義経などの形が簞入して」おり、『水滸伝』の如く兄弟の盟結へ向うのでなく、同一主君を戴く忠勇の家臣団が組織されるという点で、甚だ封建的日本的な方向に進んでしまう」。

本稿ではこのうち特に①の部分、すなわち『絵本更科草紙』前編における問題を、②を踏まえ③にも言及しながら、さらに考えてみたい。なお、④、⑤に関しては別の機会に、やはりこれを踏まえて詳しく論じてみたい。

『絵本更科草紙』前編のあらすじを左に挙げる。

戦国の世、信州村上和甲州武田とが対立していた。村上家臣楽岩寺右馬之助の娘更科は美麗にして勇力あり、武田に降った相木市郎兵衛の甥森之助に恋し結ばれる。村上の家臣牧島の弟大九郎は更科に邪恋、医師道安の謀で甲州侍の加勢を得て外出した更科を襲う。駆けつけた森之助は大九郎らを切るが、甲州侍を討つた罪で馬場美濃守に預けられる。更科は鹿之助を産み、老猿に助けられ養われるうち、子を見失う。夫が刑死したと信ずる更科はその仇を討たんと山賊の首領となり、道安を討つ。やがて夫の無事を知り美濃守に身を寄せ、市郎兵衛に養われていた鹿之助と再会、森之助らは遠州諏訪城を守る。<sup>(注3)</sup>

そして、この前編末に付けられた後編予告には、

此森之助、十年あまり諏訪が原にありけるが、馬場美濃守密に勝頼の幼児を抱き来り、森之助に言けるは、「近頃、主人勝頼、佞臣を愛し給ひ、武田の滅亡遠かるまじ。去によりて某も討死と覚悟をきはめ候へば、何卒此若君を足下にたのみ申なり。末の事をはかり給

はれ」と、託して帰りける。是より森之助夫婦、恩人の一言に、此幼君を守り立、西国へおもむき、さまざまの危難、且山中鹿之助強勇ふしぎの事ども、後編五冊にゆづるものなり<sup>(注4)</sup>

とある。ところが、実際の後編以降は、森之助夫婦は隠逸し、鹿之助が武田の遺児ではなく、後に勝久となる尼子の一子を守り立てていくという展開をみせる。その意味から、浜田氏のまとめられた②そのものに全く問題はない。ただし、この、前編と後編以降の変更のみに目が行ってしまったと、既に前編の中で起こっている歪みを忘れてしまいがちになる。横山氏が指摘したのは「前編執筆の時点においては、続きもの読本との意識はなかった」であり、前編刊行の時点ではなかった。すなわち、結果的に前編となっていく五巻完結予定の初期構想と、実際に刊行された前編では、既に予定変更による齟齬があったらしいことの指摘であった。これは、浜田氏も③の所で、「もとの更科物語を鹿之助物語に傾斜させ」と触れている。つまり、前編執筆中、何らかの原因で、続き物読本への方向転換がなされた。しかし、急遽なされた変更ゆえ、前編にはまだ後の構想がしっかりと定まらないままの後編が予告され、浜田氏の指摘する矛盾へと繋がっていったと考えられるのである。とすると、そもその初期構想とはどのような形のものであったのか。そしてどの程度の変更があったのか。

文化八年夏に書かれている葛陂山人の序には冒頭に「信の相木氏夫妻は、実は山中鹿助の父、若しくは母なり。蓋し、この父母有りて、後鹿介有り。世の人、唯、鹿介の武勇を伝へ称へ、その出る所の絶倫なるを知ることなし。その顕晦、幸不幸あるなり。さきつ歳、遠人鬼卵、浪華を客遊し、寓居の閑に、その臆する所の事蹟を記し、詳かに尽くす(原漢文。私に訓読する)」とある。また、「この編に記す所、壮士烈婦、実に希世の伉儷にして、志は必ず忠、操は必ず貞。千載のもと、人心をして感動砥礪せしむ。且つ、以て鹿介が武勇の出づる由有るを知るなり(同前)」と山中鹿之助のような英雄が生まれたのは、この両親がいたからであると述べているのである。鹿之助の両親とは、すなわち相木森之助と更科の夫妻である。つまり、葛陂山人の序文を読むに、この物語はあくまでも山中鹿之助という英雄を生み出した、その両親を描くものであるということが見てとれる。

しかし、再び作品を読むに、本当にこの前編はその方向を始めから指し示していたかどうか疑問が起る。一つには、実際この作品のストーリーは、更科を中心に展開されている(唯一、加賀のお菊と幸助の譚が挿入譚として例外か)。横山氏、浜田氏の指摘の通り、『絵本更科草紙』は『貞烈勇婦伝』の名で出願された(文化七年九月)こともそれを領かせる。葛陂山人序文中にも「更科はそれ婦の名なり」。

これを以て題とすは、殊にその艶麗にして勇力を称ふるのみ（同前）」とある。この作品の前編には更科が中心に描かれているのであって、森之助と更科の夫婦が同レベルで描かれているわけではない。この点において既にずれは生じてまいいか。二つ目に、続き物ではない五巻完結本として「山中鹿之助の両親」という設定は必要であったのだろうか。三つ目には、山中鹿之助の両親として、信州村上家の臣ということは妥当であったのか（「相木森之助幸雄」と「山中鹿之助幸盛」という名前の類似だけでこの二人を結びつけるのは、この時点では強引であろう）。以上の疑問に対し、初期構想には山中鹿之助に結びつける予定はなかったのではないか、という推論が成立する。横山氏が言う「前編執筆の時点」では、「鹿之助の母ではない更科」を中心とする譚であったのではなからうか。その後、何らかの原因で続き物読本への方角転換がなされ、実際に刊行された前編において山中鹿之助と結びつけられたのではなからうか。ちなみに、文化七年の春に書かれている鬼卵の自序には、もとの話を三条茂佐彦に聞いたこと、そしてその内容には「勇夫の辛みに男子の憤を述べ、婦人の甘みに女の禁をあらはし」たこと、が述べられており、ここには鹿之助の名前は出てこない。

続き物読本への方角転換の原因になったものは何であろうか。推論を重ねるが、それはやはり『南総里見八犬伝』

である、という可能性はまだ残っている。浜田氏が指摘するよう、『絵本更科草紙』前編は文化八年八月刊、後編は同九年刊であり、『南総里見八犬伝』肇輯刊の文化十一年より早い。しかし、『南総里見八犬伝』は文化五年の段階から近刊予告を繰り返している。例えば、馬琴の読本『俊寛僧都島物語』（文化五年十月刊。江戸・柏屋半蔵刊）に付された近刊予告（執筆予定というべきレベルだが）には、

『里見八犬士異伝』『尼子九牛一毛伝』の名が出され、里見八犬士や尼子九牛士が紹介され、さらに七馬士まで言及される。また、『新海人藻屑物語』とともに、「左の三編はいまだ他方に同趣向あるを聞ず。よりてまず、題目を標榜して、ちかきに梓行す」と述べられている。「里見八犬士」や「尼子九牛士」「七馬士」から、「尼子十勇士」の連想が働いてもおかしくない。『書言字考節用集』には、「里見八犬士」「尼子九牛士」「尼子七馬士」同様に「尼子十勇士」の名も出ている。馬琴読本の近刊予告をもとに、『八犬伝』の趣向の一つを先取りしたのではないだろうか。

続き物への転換には、当然書肆の意向が第一にある。『絵本更科草紙』前後編の版元である勝尾屋六兵衛は、この時期に『本朝水滸伝』の版權を買い取り、『芳野物語』と改題して売り出す、という商業政策をとっている。<sup>（注5）</sup>これまた『八犬伝』近刊への意識と見るのは想像が過ぎようか。ともあれ、鬼卵のような、続き物読本はこれが最初である

作者に、強引に続き物への転換をさせるには、書肆としても冒険である。成算がなくてはできないことであろう。構想の転換は鬼卯本人のみの発想で転換をしたとは考えられない。以下、これらの仮説を頭に置いて、前編を読み込んでみよう。

## 一、更科

更科は信州村上家の家臣・楽岩寺右馬之助の娘という設定で描かれる。更科の名は、村上義清の治める地である信州更科より取ったものであろう。

さて、あらためて鬼卯の自序を読むに「三条の茂佐彦丹青の余意に一つの小説を編む」「一日予にいへらく、我腹中に五巻の滑稽あり。足下其趣を綴給はんや」「勇夫の辛みに男子の慎を述べ、婦人の甘みに女の禁をあらはし」「是に蛇足を添」えたものだということが述べられている。結局どこまでが茂佐彦の原話なのかはわからないのだが、ともかくここには鹿之助に繋がるものはない。

ところで、茂佐彦の原話を基に鬼卯が著したとする読本はもう一つ存在する。それは文化十四年刊の『復讐鬼娘伝』(巻頭題下に「復讐鬼娘伝」<sup>(注6)</sup>。序題は「丹州鬼嬢伝」。初印本外題は「(復讐奇談) 鬼嬢伝」という、五巻本の読本である。<sup>(注7)</sup>

画師は北堂墨山、版元は大坂の秋田屋太右衛門(相版元に

尾張の美濃屋伊六、京の伏見屋半三郎)。茂佐彦が序文を書き、また内題下の署名には『絵本更科草紙』同様に、「三条茂佐彦趣意 栗杖亭鬼卯著述」とある。その茂佐彦の序文では、鬼卯を誉めるだけで作品内容には一切触れていない。『復讐鬼娘伝』のあらすじを少し詳しく紹介する。

## 巻一

文明(一四六九―一四八七)の頃、丹後の国幾野の城主平井大内記保房の家臣に、金窪大九郎(後に金窪大膳)という奸佞の者が居た。同じ丹後の国、与作の郡に三庄大夫の子孫である梅谷家(兄。二庄を領す)と梅沢家(弟。一庄を領す)があった。梅沢郷太は、兄・梅谷勇右衛門の病死をきっかけに梅谷の二庄をも欲し、山川流庵という医師を語らい、甥の梅谷勇太郎に<sup>1</sup>聾啞<sup>2</sup>となる毒薬を飲ませる。さらに金窪大膳に相談し、弥助という男を使って、勇太郎に盗賊の嫌疑を掛けさせ、追放させる。勇太郎は、郷太の妻・幾野に教えもらった薬の調合法で病から快復し、家僕・平三郎とともに京都に住む。ある日、何鹿姫に見初められる。

## 巻二

勇太郎追放によって三庄を得た梅沢郷太は、金窪大膳によって謀られ、関口典膳から平井保房への武術秘伝伝授の場に誘いこまれ、その罪のために追放される。

三庄を得た大膳は、典膳の娘を妻にと欲するが、嫁入りしたのは醜い姉娘の蘭花であつた。大膳は蘭花を毒殺し、妹娘の蘭菊を欲するが拒絶される。そこで蘭菊をさらひ、別宅に幽閉する。

### 卷三

丹波の国氷上の郡司の娘・何鹿姫は人を食う鬼娘との評判があり、何鹿姫の居宅を訪れる者は、陰火や化け物に会い、皆逃げ出す有様であつた。勇太郎は、その怪を全てまやかしと見破り、姫と結婚する。何鹿姫は勇太郎を京で見初めて以来、他人と結婚しないようにと鬼娘の噂を流し、また雲照眼という術師を使って勇太郎を呼び寄せる工夫をしていたのであつた。

平井保房は、氷上の郡司が家宝とする刀を欲し、金窪大膳が請け負つて交渉に赴くが拒絶される。

### 卷四

金窪大膳は氷上の郡司を殺害して刀を奪ひ、平井保房には買い取つたと言つて献上する。

幽閉されていた蘭菊は、大膳の隙を盗んで井戸に身投げをする。

追放された梅沢郷太は、妻・幾野とともに京へ向かう山中で、弥助と会い、山賊になる。雲照眼を狙つた弥助と郷太は仲間割れを起こし、斬り合い、傷ついたところを、雲照眼によつて谷底に落とされる。

### 卷五

勇太郎は舅の敵討ちのため、丹後へ赴き、関口典膳に助力を求める。

井戸に身投げをした蘭菊は、その井戸が抜け道であつたことから助かり、丹波の国主である由留木左衛門尉の嫡子・右馬之助に救われる。

関口典膳は、勇太郎や蘭菊から得た大膳の悪行の証拠をもつて平井保房に言上する。悪事露見を知つて逃げ出す大膳を待ち受けた勇太郎は、平三郎とともに見事敵討ちを果たす。勇太郎は郷太の庄も加えた三庄を領し、幾野を引き取る。平三郎を後見とし次男を梅谷の庄に、また幾野の養子として三男を梅沢の庄に置き、勇太郎自身は氷上の家を継ぎ、裕福に暮らした。

まず、『絵本更科草紙』との奇妙な類似点・一致箇所があるのに気付く。傍線部のように、「悪人の名が大九郎であること」、「医師が悪事に荷担すること」、「聾啞者が登場すること」（『絵本更科草紙』では箕田守虎が聾啞のふりをしている）、「姫が男性を見初めて、結果的に結ばれること」、「悪人が想いを掛ける女性をさらおうとすること」などが共通している。鬼卵が同趣向を使い回しているのでは、という考えも浮かぶが、現在まで管見に入つた鬼卵の読本で、このような共通点を持つものはない。そして、両作品とも

茂佐彦の原案ということがひっかかる。さらに、もう一つ奇妙なことに、悪人大九郎の出自を示す文章には「渠は素元、信州村上に仕へし者なりしが、傍輩と口論の由ありて、密にその地を立退……」と、信州村上との繋がりが示されているのである。

この作品は敵討ちものになっているのだが、敵討ちの構図は、勇太郎が舅の敵である金窪大膳を討つことである。しかし、タイトルからは、まず「鬼娘」が目を引き、鬼のような女性が活躍するかの印象を受ける。実際、鬼娘に相当するのは何鹿姫であり、それは、人を食うとの噂を流し、怪異を演出していたこと（巻三）からのものである。とはいえ、全巻を通してでは何鹿姫の印象は薄く、むしろ勇太郎を引き立てるためのような存在に過ぎない。かえって、鬼娘の譚がからまわりしてしまったかの感がある。はっきり言って『復讐鬼娘伝』は成功した作品ではない。

この作品は『絵本更科草紙』の残滓によって作られたものではないだろうか。両作品に言う茂佐彦の趣意とは同じものを指すのではなからうか。つまり、『絵本更科草紙』と『復讐鬼娘伝』との共通項のような三条茂佐彦の原話があり、多少の変更を加えて『絵本更科草紙』が出来、その後、使用しなかった部分を使いながら、山椒大夫の子孫という設定を加え『復讐鬼娘伝』が作られたのではないだろうか。考えてみれば、『絵本更科草紙』の更科の方がよほど鬼娘

にふさわしいキャラクターとして描かれている。そこで、『復讐鬼娘伝』において違和感を出している「鬼娘」を、『絵本更科草紙』の世界にあてはめてみるとどうなるか。信州で鬼娘と言えば、謡曲『紅葉狩』における戸隠山の鬼女が連想される。想像に過ぎないが、『絵本更科草紙』の初期構想は、戸隠山の鬼女の伝説を使いながら、更科の、森之助との結びつきを描くものではなかったか。ちなみに明治時代に入って、謡曲『紅葉狩』の鬼女の名が「更科」と付けられるのは、逆に『絵本更科草紙』が影響しているのかもしれない。

『絵本更科草紙』の更科をもう一度振り返ってみよう。更科の紹介は、

家老楽岩寺右馬之助が娘に更科姫とて、世に希なる美人あり。その姿の艶なる事、いにしへの西施楊貴妃はものかは、我朝の衣通姫小野小町も、面をはづるばかりの容色にて、しかも力飽まで強く、能千金の鼎をあげ、剣術は同家中に聞えたる、井上九郎光興の門人に、此更科につゞくものあらず。

と、されている。そして「まことに英雄豪傑にあらずんば、夫とはすまじき」と心に決めているのである。その後、森之助を見そめ婚姻を結ぶが、夫の慎み深さを臆病ゆえと誤解し、また悪人に狙われながらも己の勇力を頼りに外出し、事件に遭ってしまう。この辺が「婦人の甘み」と鬼卵

の序で言われていることであろう。しかし、さらにその後、更科は甲州武田家に引き渡された夫を追い、夫が既に死んだと聞くと、助命をしなかった馬場美濃守を恨み、狙う。そしてそのうちに、山賊の頭領になっていく。美女にして勇力の更科が、山寨に住み仇を狙うさまは、むしろ戸隠山の鬼女のイメージと重なってはこないだろうか。

冒頭に挙げた浜田氏の論②にある「山姥説話にもとづき」云々については、坂田金時あるいは金太郎という英雄を生み出す山姥と、鹿之助を生み出す更科とを重ねたものである。たしかに山中で鹿之助を育てる更科の姿にそのイメージがないわけではない。しかし、山姥はあくまでも英雄を生み出す母であり、他に山姥の活躍が多く描かれるわけではない。また、金時は頼光という英雄に見出されて世に出ることになる。この点は更科と鹿之助にはあてはまらない。さらに、更科が「鹿之助」を産むという設定すら否定されれば、山姥のイメージはより薄れてしまう。

「婦人の甘み」として描かれた更科は、森之助が真の英雄の姿を発揮する箇所までであった。山寨での更科は、まさしく原題『貞烈勇婦伝』にふさわしい女性として描かれている。とすれば、五巻完結の読本として「鹿之助の母である更科」は必要ないのである。では、初期構想の推察では、更科の妊娠と出産まで否定してしまうのだろうか。その点については、次節において言及する。

## 二、相木森之助と相木市郎兵衛

鬼卵の序文には「勇夫の辛みに男子の憤を述べ、婦人の甘みに女の禁をあらはし」とあった。「勇夫の辛み」とは相木森之助が目先の私事に囚われず忠義を尽くす様、また「婦人の甘み」とは更科が逆に一時の感情で行動を起こす様を言ったものである。これを考えるに、森之助が最初は臆病者かと思われるほど憤み深く、大九郎が甲州侍とともに更科を襲った際に始めて真の英雄ぶりを見せるという箇所（巻二）までは、確実に当初からの予定であったと言える。この部分までをもう少し詳しく確認していこう。

この作品の舞台は、信州の村上家と甲斐の武田家との緊張関係の中にある。まず紹介されるのは村上家の当主・左衛門尉義清。その家臣として楽岩寺右馬之助、井上九郎光興、綿内左内左衛門、相木市郎兵衛、牧島玄蕃の名が挙がっている。その中で、相木市郎兵衛は「いさゝか主を恨むる事ありて、密に国を立退、甲州の武田大膳大夫晴信に降」ってしまう。そして、この設定が、『絵本更科草紙』前編には大きく関与しているのである。

作品を読みこむ前に、当時の通俗軍書に描かれていた相木森之助と市郎兵衛の姿を確認しておく。当時の作者や読者は、彼らに対しどのような共通認識を持っていたのだら



うか。まず、片島深淵子の『武田三代軍記』（享保五年「二七二〇」刊）では、市郎兵衛に相当する「相木市兵衛尉（相木周防守）」という人物が、村上義清の家臣として登場する。そして、

茲に、信州佐久郡相木といへる所の城主をば、相木市兵衛尉と号す。去る天文九年より、甲府へ内通の仔細ありけるが、此度、味方に参るべき由の密約、既に相究り、大将晴信、十一月下旬、甲府に凱陣ありしかば、十二月十日、相木市兵衛尉、甲館に出仕して、御礼を申す。明年正月、舎弟甚四郎を人質に差越しけり。

と、武田家への内通・投降が描かれている。一方、相木森之助は、村上家ではなく加々美家の家臣として、その名が見出せる。そこでは、そもそも加々美家は武田の一族であったが、加々美家の家人である石原小六なる人物が、主君・加々美四郎の寵愛する小姓を殺し、逐電して武田信虎のもとに参じ、かつ加々美は村上家と通じ陰謀を企んでいると讒言したことから確執が起こり、戦になったとされる。ここで武田信虎に攻められた加々美四郎の兵の一人である森之助（「森之介」と表記される）は、「大太刀を打振り」活躍する「元より大力」の士と描かれるが、加々美家没落の後は一切記されない。

前編に安永三年（一七七四）の序文を持つ『山本真田勲功記』ではどうか。ここでも市郎兵衛に相当する「相木市兵衛」

の投降が描かれるが、それは武田家からの策によってのものという形を取る。すなわち、武田家の軍師・山本勘助が、真田幸隆に「相木市兵衛友行は国人の中にも大身にて縁類広く小賢しきものなり。彼人を味方になさば其余の国人等自然と帰伏の心発すべし」と説客となるように勧めてなし、「相木元より富貴を愛し貧しきを侮る心有りしかば、真田家人数多引連れ華麗にて来りしかより聞くより」投降を決めてしまうのである。なお、森之助の記述はない。

『武田三代軍記』と前後して成立した『真田三代記』では、市郎兵衛に相当すると思われる相木市兵衛は最初から武田の臣として登場するが、その描写はほとんどない。一方、相木森之助はより英雄として描かれる。この中で森之助は、まずはやはり加々美（「加賀美」と表記される）四郎の臣として登場し、真田幸隆の軍と戦う。そこでは、「相木森之助迎大剛の者、洗皮の鎧に鹿の角の前立打たる冑を着し、四尺許りの大太刀を打振」と、その活躍が描写され、「跡部勝五郎城中へ乗込んと働きしに、相木森之助衝と走寄、跡部を切伏首を搔落す」という活躍も描かれる。幸隆は知略を以て相木を生け捕り、礼節を以て説き、家臣になすのである。以後、幸隆の戦においては森之助は常に登場し、大長刀を振るって大活躍をし、村上義清の軍勢とも戦うのである。

こうして見ると、当時の通俗軍書では、相木市郎兵衛に

相当する人物は、村上から武田へ降った者であり、しかもその行為を批判的に描かれている。一方、森之助に相当する人物は、村上ではなく加々美の臣であり、『真田三代記』では後に武田家（真田の臣として）につき、村上家と敵対する。真田幸隆に説かれ、結果的に武田側の臣に属する点には、『絵本更科草紙』において、結果的に武田の臣である馬場美濃守の恩義に應える点に繋がっていくのかもしれないが、特に結びつける必要もなからう。上記の三作は『絵本更科草紙』の典拠といえるものではなく、また、他にも類似する世界を描いた通俗軍書があるかもしれないが、これだけの資料の段階では、相木市郎兵衛の造形は通俗軍書に描かれたものをほぼそのまま描き、一方相木森之助という人物を市郎兵衛の甥と設定し、村上の臣とした（『信府統記』では村上の臣として「相木」の名が挙がる）所が『絵本更科草紙』の工夫であったと考えられる。

『絵本更科草紙』の中で相木市郎兵衛は、通俗軍書同様に武田家へ投降する。以下、その後、その甥である森之助はどのような描かれ方をされていくか、考察する。

森之助の紹介は次のように始まる。

爰に先年国を立退、武田家へ降参せし相木市郎兵衛が甥に、相木森之助幸雄といふものあり。今年廿一歳にて、顔色美玉のごとく、威有て猛からず、終に怒りをあらはせし事なし。叔父市郎兵衛が降参を諫けれど、

用ひざればやむ事を得ず、其身は信州にとゞまり、忠臣無二に仕へける。されど義清は叔父が不忠を怒り、森之助をもおもく用ひず、平士になして年月を送りける。

「叔父の不忠を恥て閉籠り、兵学のみ心に心を委ね」ている森之助を特に称美し、村上の為に推挙しようとするのが井上九郎である。しかし、森之助は井上九郎に対し、

叔父なるものは不忠を懷き、甲州へ逃去候へども、我は世々君恩を辱せし身なれば、独とゞまり罷在り候といへども、叔父の悪行に恥入り、漫に他出さへいたさぬ心底に候。殊に我を用ひ給ふときは、信甲の合戦に叔父敵方にあれば、もし裏切やせんなど、諸卒のうたがひなきにしもあらず。我は此まゝ捨おき給ひて、君の一大事のとき一命を奉りて、人口を塞ぐの外念願さらにこれなく候

と、あくまでも、叔父の不忠を恥じていること、その為に日常謹慎していること、そしていざという時に命を捨てて忠義を尽くそうとしていることが述べられている。一方、そんな森之助に対し、後に井上九郎は、「森之助忠を思ふといへども、主君うたがひ給ふときは、終に此国を去らんと計がたし。他邦にて此人を用ゆるときは、虎を竹林に放すがごとし。右馬之助が聳となし置ば、足を繋ぐに屈竟の事なり」「されば今天下悉く乱れ、豪傑時をえたる時節な

れば、森之助がごとき人傑を用ひ給はずんば、終に他邦に去らん。其時悔るとも詮なかるべし。息女を蹊<sup>き</sup>となし当家に置ときは、時節至らば跋群の高名せんものは彼なり」と思い、更科との縁談を薦めるのである。戦国の世の中、一途に忠を尽くそうとする森之助、そしてこれまた主君のために遠謀を働かせ森之助を村上家に止めようとする九郎の思いがそれぞれ描き分けられている。また、九郎の言葉は、後に森之助が他家へ行くことの伏線にもなっているのかもしれない。

森之助と更科の婚姻が済んだ後、悪役の牧島大九郎が登場し、更科に横恋慕という展開を見せる。ここで注目すべきは、前後に村上家と武田家との関係の変化を平行して描いていることだ。すなわち、

頃は天文の末、武田晴信朝臣の武威旭ののぼるがごとく、さしも強勇の聞えある、小田井又六郎兄弟を一時に責ほろぼし、諏訪頼茂も殺害せられ其家亡び、木曾の左馬之助も近ごろ和を乞ければ、村上義清今はたのむ木陰に雨漏りて詮方なければ、降となく和となく、しばらく音信を通じければ、晴信朝臣も山本勘助が諫にて、「隣国の小せり合に心をかけ給ふ事なかれ。天下平定の覇をおもひ給へ」とありしゆゑ、義清が手指せぬをよき事に思し、越後の上杉輝虎をのみ、大敵なりと防禦厳なりける。

との描写である。この直後に大九郎の横恋慕が描かれ、小田井又八を擁して、囲碁の際、しきりに森之助に喧嘩をしかけようとする。森之助は取り合わず、更科は夫が実は臆病なのではないかと疑い始める。更科が森之助の臆病を確信するのは、甲斐侍と上方武士との喧嘩に行き合わせ、その恐ろしさに真つ青になって帰宅するということがあつてであるが、これはさすがに筆が滑つたと言ふべきか、読者に対しては森之助が真の臆病者と受け取られてしまう（ただし、この点についても弁解の余地があることは後述する）。ともあれ、森之助を臆病と判断した更科は八幡宮へ参詣し、夫に自分の力量を授け給えと祈願することになる。参詣の折を待ちかまえた大九郎は更科を襲うが、更科の勇力の前にあえなく打ちのめされる。意気揚々と引き上げた更科に対し、森之助は実家で謹慎するように命じる。と、ここまでは丁度巻一であり、謹慎を命じた理由は巻二巻頭で「されば森之助が更科を親里へ厳く預けし趣意は、近頃牧島大九郎、甲州武田晴信の佞臣長阪左衛門尉、跡部大炊とむつみ諂らひて、信州の一つの病となりぬれば、右馬之助、九郎もこれに心を置ける。去ゆゑに森之助其人の悪を言ず、女房を責て舅方へ送りける」と明かされることになる。巻の区切りを利用した転換は当然意図的なものであろう。しかし、そんな夫の考えを理解せず、更科は再び外出した際を大九郎に襲われる。しかもこの度は甲州の侍である

長阪兵庫、跡部七之助を伴つて大勢を催してのことであつた。知らせを聞いた森之助は「嗚呼天なるかな我家の亡る時節なり。しかし此まゝ捨おき、婦人を恥しめんは男子にあらず。さらば死出の用意せん」と、死装束をして鎧を持つて馳せ参ずる。ここで始めて、森之助の真価本性が発揮され、その武勇のもとに大九郎ほか、小田井、長阪、跡部らも全員殺されるのだが、その中で小田井又八に対しての「頃日暮の席にて無念をこらへし打手がへし、皆殺しにして呉ん」との発言は、以前の暮の席での忍耐が深慮から来るものであつたことを証明し、また、大九郎に対しての「年月のうらみ思ひしれや」との発言も同様である。ここに始めて更科は己の誤りに気付き、「夫の勇猛をはじめ見て、且よろこび、且悲しみ、よゝと泣出し、また「自害せんとする」のだが、これを「森之助が臆病でないことがわかつた」とだけ見るのは浅い読みにならう。これまでの夫の行動が深謀遠慮に基づくものであつたことを理解し、自らの軽率な振る舞いを知り後悔したのである。そのことは更科の「我罪科は船車にも積れず侍る。夫をかるしめ女の道をわすれ、かゝる大事を引出しぬるも、わらは一人の心よりなり」という台詞、また、それに対する森之助の「かゝる事のあらせまじと、さまぐ心をくだきし甲斐もなく、かやうになるも天運なり」との答えが証明する。ここで森之助は「天運」という語を使うが、これはその後

「天命」という言葉に変わつて繰り返され、また「其科を悪んで其人をにくまずとは君子の詞なり」という台詞からも、いざ事の起きてしまつてからは諦めるというさっぱりとした気性が見てとれる。つまり、この場面では徹底的に森之助を真の英雄たらしめているのである。

この箇所では、前に喧嘩を見て青ざめ、更科に臆病者と思われろという場面に対しての一応のフォローも描かれている。すなわち、更科の罪を責めて斬らうとする右馬之助に対し森之助は、「かゝる事の出来たるも天命也。且は我誤りなり。いかんといふに、聖人も過たるはなを不及がごとしと宣へり。我事を慎むにすぎたるゆゑ、婦人の心より億病者とおもひ、神に祈りて勇氣を増んとする、憎むべきにあらず」と、更科の思いも社参の理由も理解していたことが示されるのである。「事を慎むにすぎたる」とは、慎むあまり妻の前で臆病のふりさえしたことを指しているのであらう。

この私闘で森之助は武田家家臣の長坂釣閑、跡部大炊介らの縁者を殺してしまい、その身を武田家に引き渡されることになる。詳細は省略するが、ここでも村上家と武田家との関係、互いの思惑が丁寧に叙述されるのである。武田との戦いも辞さじとの村上義清に対し、森之助は次のように訴える。

かゝる小事に御旗を上られ、勝べき軍ならず。今四、

五年も甲州に随ひ給はゞ、上杉輝虎討て出ん。そのとき両方より責給はゞ、勝利うたがひなし。やはり此度は某を甲州へ渡し給ひ、長阪跡部が心のまゝになさしめ玉はゞ、晴信いよいよ心をゆるし、信州のともがら取るに足らずと慢心おこらん。そのとき図をはづし給はぬこそ、良將の御心ならん。ひらに某を甲州へおくり玉はれ。

大局を見定め、自らを捨てて忠義を尽くそうとする森之助の意志が読みとれる。結果として、森之助の進言通りに事は運ばれるのだが、ここで発せられた「我かゝる忠臣を眼くらくして用ざる事の愚さよ」との義清の言葉には注意したい。もとを辿れば、義清は相木市郎兵衛の武田家投降を怒り、森之助を用いなかったこと、森之助は叔父の不忠を恥じ、自らの忠義を顕す機会を窺っていたことが遠因としてあったのである。また、やはりこの場面で描かれる、大九郎の兄であり村上家の重臣である牧島玄蕃の態度も見逃せない。玄蕃は大九郎の悪行を心から恥じ、自害しようとまでし、また森之助を武田家へ引き渡すことに反対し、武田家との戦には先鋒で出陣する意志まで示すのである。森之助を武田家に渡すことが決まってからも、「相木の家は某が身にかへて立申べし」と言い、井上九郎も、妊娠している更科に対し、「安産して、相木の家を立給ふこそ貞女の鑑なれ。左あるときには牧島玄蕃が志も立なれば」と、

玄蕃の援助による相木の家再興が約束されていたのである。ここで巻二が終了する。

さて、ここまで丹念に森之助の描かれ方を追ってきたが、村上家と武田家の間の緊張関係と、その中での相木市郎兵衛の投降が重要な設定となっていることが確認できた。その後、晴信と馬場美濃守による森之助助命策、更科の活躍など、興味深い展開を見せるのだが、本稿では触れない。問題としたのは、後に巻二までの設定が反古になるような展開が描かれることだ。それはまず第一に、巻五において、相木森之助が叔父市郎兵衛と再会する場面である。さまざまに展開の後、馬場美濃守に許され、森之助は更科とともに市郎兵衛の家を訪ねるのだが、「かたじけなしと夫婦市郎兵衛が宅にきたり、疎遠の情を述べれば、市郎兵衛は死したる森之助に逢、よろこぶ事かぎりなし」と、ひどくあっさりとは再会がなされてしまう。森之助の咎め立ても市郎兵衛の弁解もない。ここには、巻二までに描かれてきた、叔父の不忠を恥じていた森之助の姿は一切描かれていないのだ。

森之助と市郎兵衛の再会は巻五においてであるが、それ以前に、巻三において武田家での市郎兵衛が登場している。そこでは、

爰に先年村上義清をうらみて、信州を立退ける相木市郎兵衛といふ者あり。強勇の聞えありて、晴信重く

是をもちひ、たび／＼の戦場に高名の美名をあらはしける。此たび甥森之助捕はれとなりて甲州へきたれども、一言の事さへいひ出すべくもあらず、つひに美濃守がやしきにて切腹せしよし、久々対面さへなく、剩おなじ家中にて相果し事、不便とはおもへども、降参の身はしらず貌にくらしける。しかるに市郎兵衛が倅市之丞、去年はじめて男子をもふけしかば、市郎兵衛は初孫を見てよろこびありけるうち、疱瘡をわづらひ身まかりければ、さしも勇猛の市郎兵衛なれども、恩愛のかなしみにちからをおとし、森之助が事までも思ひつゞけ、近ごろは念仏者となりて、日毎にたのみ寺法成寺へ詣ける。

と、すっかり気弱になり、森之助のことも憫んでいる姿が描かれている。この後、塩尻山の麓で行方不明になった鹿之助（森之助と更科の子）を市郎兵衛が拾い、養うことになる。そして、先述の巻五において描かれる、森之助夫妻が市郎兵衛を訪れる場面では、鹿之助が無事両親の手に返されるのである。繰り返すが、ここでは、森之助と市郎兵衛の間に何のわだかまりもなく、市郎兵衛に対し村上家への「不忠」を問いたたすこともない。森之助自身が結局は武田家に生かしてもらったから、というわけでもあるまい。つまり、ここでの森之助と市郎兵衛の間のなごやかな場面は、巻一と二に描かれていた設定を完全に否定

するものだと言えよう。作者の構成の未熟さと片付けることもできる。しかし、想像を伸ばせば、これもまた初期構想からの変更により生じた「歪み」なのではなからうか。

作品中で市郎兵衛が担った役割は何か。それは、鹿之助を拾い、両親の手に返すことである。逆に言えば、鹿之助の話がなければ市郎兵衛の登場理由はないことになる。すなわち、この「歪み」の理由も、続き物化によって引き起こされたものと考えられるのだ。一節で考えてきた更科の問題でも、「鹿之助の母である更科」は、五巻完結型では必要ではなかった。やはり、「歪み」は鹿之助に関わって生じているようだ。

一節で保留しておいた「更科の妊娠と出産」についてはどうか。ここまで否定することはないであろう。ただし、その子は鹿之助ではない。牧島玄蕃によって再興を約束された、相木の家の後継（相木の姓を名乗らない場合を含めて）としての子ではなからうか。そう解釈していけば、かなり歪みは解消されるのである。

以上、結局のところ全て推論の域を出ないが、初期構想の段階（『貞烈勇婦伝』の段階）では更科中心の譚で鹿之助は絡んでこない、というのが私の見解である。続き物の構想に変えた理由は、『八犬伝』近刊の情報によってかもしれないが、これははっきりとはわからない。しかし、『絵

本更科草紙』前編には、既に構想転換のための修正がなされ、その時点で更科の子が鹿之助となった。この時点で、尼子十勇士への繋がりを感じ取っても良いかと思われる。ただし、それはむしろ書肆の意向であったようである。前編に付された後編予告が、実際の後編以降の展開とは全く違ったものとなっているのは、とりあえず構想転換はなしたものの、その後をどうしてよいかわからない状態である鬼卵を映し出しているようだ。

初期構想の想定と、前編に見られる歪みの理由の推察は、堂々巡りになりがちな探究である。また、歪みの原因は作者の単純な伎倆不足という可能性も残らないではない。しかし、続き物化という明らかな変更が事実として見出せる以上、考えてみなければならぬ問題である。そして、歪みの原因が鹿之助の登場という点に収束できるのなら、それは初期構想の問題とも補完しあうことになるのであろう。本稿では、右のように初期構想の想定と、前編に見られる歪みの理由の推察を行った。ゆえに、結果として提示された『絵本更科草紙』前編の分析や評価には至らなかった。馬場美濃守をはじめ、武田晴信、長坂釣閑、跡部大炊介、また箕田五郎守虎らの登場人物の問題、馬場美濃守と相木森之助との相貌類似の問題、さらにお菊幸助の挿入譚の問題など、まだまだ考えるべき点は多い。前編だけでも論ずる余地はあり、またその価値がある作品であると信じている。

(注1) 大坂本屋仲間に残る記録は以下の通り(大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録』による)。

- 『貞烈勇婦伝』全部五冊 作者 遠州日坂 栗枝亭鬼卵 / 勝尾屋六兵衛(文化七年午九月『新板願出印形帳』)
- 「勝六より、先年貞列勇婦伝御願相済在之候処、此度更科双紙と外題相改申度趣口上書差出し候に付、新規之事に候へ共、右振合を以て口上書相認め上げ本致候。尤上げ本之扣に口上書扣在之、且勝六より之口上書扣へ留置候事」(文化八年七月二十日『出勤帳』)
- 「更科草紙上げ本持参。并に外題替届け」(文化八年七月二十三日『出勤帳』)
- 「絵本更科草紙、外題替に付願写本を差出し、口上書文言少々書改候様被仰候事、右江川氏於御宅」(文化八年七月二十六日『出勤帳』)
- 「絵本更科草紙、願本口上書認直し置候事。同、願本とよみ合せ候事」(文化八年七月二十九日『出勤帳』)
- 「絵本更科草紙 全部五冊(添章出す)」(文化八年八月二十日『出勤帳』)
- 「更科草紙後編、勝尾屋六兵衛願」(文化八年八月二十日『出勤帳』)
- 「絵本更科草紙」後編全部五冊 作者 遠州日坂 栗枝亭鬼卵 / 開板人 博労町 勝尾屋六兵衛(文化八末年八月『新板願出印形帳』)
- 「更科草紙後編、上げ本持参(翌日添章)」(文化九年正月二十四日『出勤帳』)
- 「絵本更科草紙」三編全部五冊 作者 遠州日坂 栗枝

亭鬼卵／開板人 博勞町 河内屋嘉助（文化十四年閏十一月『新板願出印形帳』）

（注2）横山邦治氏『読本の研究―江戸と上方と』（昭和四十九年、風間書房）。浜田啓介氏「近世小説の水滸伝受容私見―『坂東忠義伝』と『絵本更科草紙』」（『近世小説・営為と様式に関する私見』所収。平成五年、京都大学学術出版会）。以下、引用する横山氏、浜田氏の論は、特に断らない限り全てここからのものとする。

（注3）『日本古典文学大辞典』（昭和六十年、岩波書店）所収の横山邦治氏執筆項目「絵本更科草紙」による。

（注4）『絵本更科草紙』からの引用は広島文教女子大学所蔵本（後印本）による。ただし、私に句読点等を付し、また振仮名を削除した。以下同様。

（注5）大坂本屋仲間記録『出勤帳』文化九年三月二十日の項、また同年五月十一日の項に記載がある（大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録』による）。

（注6）ただし、巻頭題下の「鬼娘伝」部分には、「きじやうでん」と振仮名を付されたものと「きらうでん」と付されたものとの二種が混合する。形からは、一部の「じや」が「ら」に誤刻されたものかと思われる。

（注7）『絵本更科草紙』と『鬼娘伝』が、ともに三条茂佐彦の原案によるものであることは、長友千代治氏「上方読本の展開」（『読本の世界 江戸と上方』所収。昭和六十年、世界思想社）で既に紹介されている。ただし、長友氏は「楠里亭其楽」（『近世上方作家・書肆研究』所収。一九九四年、東京堂出版）の中で、『鬼娘伝』を楠里亭其楽の楠

作作品とし、その理由として「刊記には『著述南里亭其楽／画工浅山芦国／筆工浪速山田平蔵』とある。著述者は内題下と刊記に二名連記されるが、前項（稿者注・『軽口笑かほ』《内題「軽口笑福路」を指す》と同じ書肆ということからも推定されるように、楠里亭が秋田屋太右衛門のもとで補作したことは確実であろう」として、注にはその刊記を示している。しかし、これは『鬼娘伝』の後印本に他本の刊記をそのまま付けた、貼り付け型刊記を見誤ったのではないか。『鬼娘伝』には巻五・二十丁裏に印刷された「著述 栗杖亭鬼卵（印）／画工 尾陽 北堂墨山（印）／文化十四丁丑年正月／書林／尾州名古屋 美濃屋伊六／京都寺町通 伏見屋半三郎／大阪心斎橋通 秋田屋太右衛門」なる刊記を持つものも存在する（例えば、島根大学堀文庫所蔵本）。

### 【補記1】

稿者の勤務する広島文教女子大学には、自主ゼミとして近世期の版本・写本を翻字していく「原典講読ゼミ」というものがある。このゼミに参加した学生の中からは、四年次に執筆する卒業論文において、読本や草双紙の翻刻を独自に試みたのちに研究を進める者も出てくる。平成九年度に卒論を執筆した鶴原朋美さんは鬼卵の読本『敵討蟹猿奇談』（広島文教女子大学所蔵本を底本とした）を翻刻し、また『絵本更科草紙』をも研究対象に含めた。さらに、平成十二年度に卒論を執筆した谷口文子さんは『復讐鬼娘伝』（巻一～四は藤沢所蔵本を、巻五は中村幸彦氏本を底本とした）を翻刻し、研究した。本稿は



この両名の卒業論文が刺激となって生まれた。両名には厚く感謝する次第である。なお、本発表に関連する、両名の指摘は以下の通りである。

(i)『絵本更科草紙』前編において、相木森之助が臆病の振る舞いを見せるのは、森之助の本性から考えて、矛盾した描写である。この部分は評価できない。(鶴原さん)

(ii)『復讐鬼娘伝』というタイトルに相当する「鬼娘」が誰に相当するのかは、はっきりしていない。表面的には何鹿姫が「鬼娘」なのだろうが、巻三の中にのみのものであり、納得がいかない。(谷口さん)

#### 【補記2】

本稿は、平成十三年度上智大学国文学会夏季大会において、『絵本更科草紙』序論』との題で口頭発表したものの後半部に加筆したものである。

(本学助教授)